

小池昌代・塚本由晴 著

『建築と言葉：日常を設計するまなざし』

(河出書房新社、2012年、B6判、232頁、1,300円+税)

山田悠介

1.

ある場所に、建物を建てる。そのためには、施主、設計者、建物を建てる職人など、さまざまな立場の人が、言葉、図面、模型をはじめとする多種多様なメディアを用いて互いの意見を交換し、完成像を共有する必要がある。たしかに、建築には、こうした人と人とのコミュニケーションが必要不可欠である。だが、建築における「コミュニケーション」は、それだけにはとどまらない。人と建物と自然という三者のあいだの「コミュニケーション」もまた、なくてはならないものなのだ。あるいは、このように言えるかもしれない。その三者のあいだの相互作用を視野に入れてはじめて、建築という営みを理解することができるのだ、と。詩人で小説家の小池昌代氏と、建築家の塚本由晴氏の対談が収められた『建築と言葉——日常を設計するまなざし』は、建築に関わる多層的な「コミュニケーション」をめぐる書である。

詩人・小説家と建築家という分野を異にする二人の対談は、二つの時期に行われたものだ。序章だけが他の4章よりも早い2009年12月に行われた対談（これは、『建築雑誌』2010年3月号に掲載されたテキストの再録である）であり、第1章から第4章は、2011年の2月、4月、10月、11月に行われた対談である。小池氏と塚本氏は5回の対談のなかで、建築の「目的」を考えると社会や人間のあり方を根本から問い直すことに繋がるとい話をはじめ、建築のもつ社会構築に関する役割、公共の施設のあるべき姿、高齢化する日本における建築の社会的枠組みには何が求められているのかなど、じつに多様なトピックを俎上に載せてゆく。二人の対話に接した読者は、個人にとっても、また社会にとっても建築がいかに重要な営みであるかを知ると同時に、現代の日本社会が喫緊に取り組まなければならない諸問題について考えるための数多くのヒントを得ることができよう。

2.

本書のなかで、人間と建物と自然という三者の関係についての議論が深められている一つの要因となったのは、2011年3月11日に発生した東日本大震災である。第1章と第2章収録の対談のあいだに震災が発生したため、第2章以降では、東日本大震災とその後の復興のあり方について幾度となく言及されている。震災前の2009年に行われた対談（序章）のなかで、塚本氏は、

近代建築が、自然と人間を「切り離す」方向で進められてきたことを指摘していた。そして高度な技術を手に入れたことで、現代の建築はより便利に、より快適な生活を可能にしてくれている反面、私たちは自然と「折り合いをつける感覚」を失ってきてしまっているのではないかと語っていた (p. 21)。そうした危惧が残念ながら現実のものとなってしまったのが、この度の震災による甚大な被害である。震災発生直後の2011年4月4日に東京で行われた対談(第2章)の冒頭で、塚本氏は、土木技術の発達によって津波の危険は排除されたと信じこまれていたために、海辺の低い土地に津波のリスクをまったく想定していない建物が建てられてしまったと述べ、悔しさを滲ませている。また、高台に設けられた神社などの建物の多くが被災を免れている一方で、かつては田畑として使われていた土地を宅地に変えた地域が大きな被害を受けていることにもふれ、どのような建物を建てるかだけでなく、そもそもどのような場所に建物を建てるかも重要であったことを指摘している。「自然のリアリティから経済のリアリティの方に重心が移り、経済活動が人間の生きる条件になってしまった」ことが、津波による大きな被害を受けることになってしまった一因だったのではないかとという言葉は重い (p. 74)。建築を生業とする塚本氏の言葉にふれた読者は、これからの住まいづくりや都市計画には、津波をはじめ、台風や大雨、雷などの自然現象の振る舞いを意識することが必須であるということを改めて強く認識することだろう。

塚本氏は、東日本大震災に直接言及していない箇所でも、近代的な建築が、重力をはじめ、太陽、雨、風などの自然環境の「振る舞い」を排除しようとしてきたことに疑問を呈し、建物と自然とを切り離さずにとらえることの重要性について述べている。たとえば、昔ながらの瓦を使った屋根について言及している箇所では、瓦屋根の建物の場合、「雨は建物の存在の一部になっている」という非常にユニークな言い回しを用いて、雨という自然現象と建物との関わり合いについて語っている。雨が降り、その雨を瓦の「一枚一枚が受け渡していく」ことで、はじめて屋根が、そして建物全体が真価を発揮するという見方を提示する塚本氏。人間にとっても建物にとっても決して避けることのできない雨という自然現象を、排除すべきものとしてではなく、むしろ建物を賦活するものとして認識しようとするこの発想は、私たちの自然との関わり方を考えるうえで非常に示唆的である。もちろん、瓦屋根にするためには、必ず屋根に勾配をつけなくてはならないし、コストが嵩むという問題点もあるだろう。瓦ではなく近代的な工業製品であるゴム系や塩ビ系のシートを使用して屋根を設えるほうが、デザインの幅も広がり、利便性も高いかもしれない。だが、そうした素材を用いた屋根をつくった場合、日本のように降水量の比較的多い地域に住んでいながら、「雨のことなど考えなくてもいいことになってしまう」と、塚本氏は感情の鈍麻を懸念する。小池氏もこの言葉に対して、「それは味気ない」と応え、撥水性が高く、一気に水を乾燥させる素材だけを用いることは確かに便利かもしれないが、「濡れている部分と乾いている部分の境目がない」屋根ばかり見て暮らしていくと、「時間の推移」を意識することがなくなり、「人間の感受性が確実に変わってしまう」のではないかと危ぶんでいる (pp. 171-172)。建物と自然との関係を考えることが、同時に、人と自然との関係を考えることでもあるということが、二人の対話からうかがえよう。私たちが自然に対してもつ価値観が、建物のありようやその評価を左右する場合もあれば、建物自体が人と自然との関係を構築したり両者の関わり方を変容させる場合もあるのだ。

3.

建築においては、人間と建物と自然という三者は互いに密接に関わり合っており、それらを切り離して建築の本質を掴むことはできない。塚本氏の「自然の要素の振る舞いと、人間の振る

舞い、それから建物の振る舞いという異なる水準で観察できる振る舞いがひとつの建築に重ね合わされていることが当たり前で起こっていて、そこが建築の強みではないかと考えています」(p. 17) という言葉には、そのことがきわめて明確に語られている。塚本氏のこの言葉に、「コミュニケーション」には、人間と人間のあいだの「コミュニケーション」だけでなく、人間と人間以外の存在、すなわち〈世界〉との「コミュニケーション」も含まれるというツヴェタン・トドロフ(1986)の言葉(cf. 野田, 2011)を重ねてみれば、建築には、〈人間と人間のコミュニケーション〉だけでなく、〈人間と自然とのコミュニケーション〉と〈人間と建物とのコミュニケーション〉という局面もあるということが明らかとなろう。小池氏と塚本氏の建築をめぐる対話をもっとも魅力的にしているのはこの部分、すなわち、建築における〈人間と自然とのコミュニケーション〉と〈人間と建物とのコミュニケーション〉にも目を向けることを忘れていないという点にあるといっても過言ではない。

二人が〈人間と自然とのコミュニケーション〉をことのほか重視しているという点については、すでに対談の一部を引用しつつふれたのでこれ以上言及することは控えるが、〈人間と建物とのコミュニケーション〉に関しても、小池氏と塚本氏が随所できわめて興味深い言葉を残していることを最後に指摘しておきたい。評者にとってとりわけ印象的だったのは、「私は子どもの頃、実家の空間に心が育てられたと思っていますのです」(p.17)という小池氏の言葉と、塚本氏の、古い大学の校舎では、「まさに、今、ここであなたたちが勉強することは、すごく祝福されるべきことなのだよと、建物が伝えている」(p.138)という言葉である。「人々と、場所あるいは環境との間の、情緒的な結びつき」(2008, p.27)と定義される、地理学者イーファ・トゥアンのいう「トポフィリア」の概念を彷彿とさせる二人の言葉は、家も、学校の校舎も、人びとが集い、生活するための単なる容れ物などでは決してなく、人の心を育み、学びを充進させる場であり、私たちと密に関わり合う存在でもあることを思い出させてくれよう。

以上、本稿では評者自身の関心に基づき、主に「環境コミュニケーション」の観点から本書の内容を紹介してきた。そのため、日本社会における建築の役割や、都市と家の関わり、詩と建築の接点など、対談中で語られていた魅力的な部分を少なからず取りこぼすことになってしまったことは否めない。ぜひ本書を手にとって、時に大きな飛躍を伴いながらダイナミックに展開してゆく両者の対話に耳を傾けていただきたい。改めていうまでもないことだが、建築は、社会、文化、歴史と密接に関連し、きわめて幅広い問題系を論じるための手がかりに満ちている。本書が、読者一人一人の関心と、建築との隠れた接点を見つけ出すヒントとなり、各々の思索を深める一助となれば、評者としてそれに勝る喜びはない。

参考文献

- 野田研一(2011)。「世界／自然とのコミュニケーションをめぐる」鳥飼玖美子・野田研一・平賀正子・小山亘(編)『異文化コミュニケーション学への招待』(153-167頁)。みすず書房。
- トドロフ, T. (1986). 『他者の記号学：アメリカ大陸の征服』(及川馥・大谷尚文・菊地良夫・訳)。法政大学出版局。[原著：Todorov, T. (1982). *La conquête de l'Amérique : La question de l'autre*. Paris : Seuil].
- トゥアン, Y. (2008 [1992]). 『トポフィリア：人間と環境』(小野有五・阿部一・訳)。筑摩書房。[原著：Tuan, Y. (1974). *Topophilia: A study of environmental perception, attitudes and values*. NJ: Prentice-Hall].